

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2019年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

Twitter https://twitter.com/shinran_bc

2019.12

第71号

「信」をかえりみる——難波大助の問い——

親鸞仏教センター研究員 東 真行

ときに思いめぐらす問いがある。1923年12月27日、当時皇太子であった昭和天皇を狙撃した、難波大助（1899 - 1924）の問いである。その問いは、檜橋渡が回想録『人間の反逆』（芝園書房、1960）に記すものであり、そのまま事実であるかは定かではない。しかし「信」を思うとき、その問いは私に突きつけられる。

裁判での出来事である。裁判長は難波の父が書いた手紙を涙ながらに読み聞かせた。情感に襲われた難波は「ああ、今少しく親のことを考えたら、このような行動はなさざりしものを」と嘆く。しかし、その直後「今申し述べたことは全部取り消します」と述べて、裁判長ならびに検事に三つのことを問いたいと切り出す。「まず尋ねたいことは、裁判長も検事も天皇に対しておそれおおい、おそれおおいとまるで天皇を神のように言うが、ほんとうに天皇は神のようにおそれおおいのか。私にはその気持ちが湧いて来ない。ほんとうにそういう気持ちが湧くのか、それを心から尋ねたい」。裁判長も検事も黙して答えない。「しからは、天皇は神ではないが、国家生活を営むうえでの扇の要のごときものとして、その存在を尊敬し、肯定しているのか」。この問いに答える者もない。「ならば、刑法上の不敬罪など、恐るべき刑罰の威力に屈して、そのような態度をとっているのか」。

法廷は陰鬱な沈黙におおわれた。その沈黙を破ったのも難波である。「われ遂に勝てり。君らが答え得ないところに自己欺瞞がある。君らは卑

怯者だ。私は真実に生きる喜びを実証した。われを絞首刑にせよ」。判決から2日後の1924年11月15日、死刑が執行された。

私はここで天皇制の是非を問いたいのではなく、まして難波を称讃したいのでもない。難波のいう勝利とは、真実に生きる喜びとは何なのか。疑問は多く残るが、さきに述べたように「信」をかえりみるとき、この問いは重要な意をもつのではないか。

第一の問いがすべてののはじまりである。すなわち、なぜ〇〇はおそれおおいのかという問いである。ここでは畏敬の根拠が問われている。仏教において「信」の根拠は、釈尊に求められる。だから、仏教徒においては「仏」が、そこに問われるべきである。成仏した釈尊への無限の尊敬が仏教を、そして教団を支えてきた。確かに「おそれおおい」ことである。しかし、ゴータマは何をもって仏として仰がれるのか。ゴータマが仏陀となったという一大事をどう捉えるのか。

親鸞は阿弥陀仏を説きたまえる釈尊を拝した。「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず」（『歎異抄』）。私はどうだろうか。仏を仰ぐのは、日本社会にとって有益であるから、あるいは何らかの罪責をおそれているからなのか。私は何に手を合わせているのか。

何の強制でもない、自由な選^{つまず}びとしての「信」を思うとき、難波大助の問いが私の躓きの石となる。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤0

冥衆—見えざる存在の支え

親鸞仏教センター所長 本多弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第124回がビジョンセンター東京八重洲南口で、第125回と第126回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第122回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター囑託研究員 越部 良一）

親鸞聖人は、真実信心には「冥衆護持の益」があるとおっしゃる。冥衆、それは見えない存在。我々は感覚器官で感じとれる内容を存在だと。特に現代はそういうふうになっておりますけれど、感じたり見えたりしない存在も存在としてあるのだと。言葉としては例えば神、神と言っても、いわゆるヨーロッパの神ではなくて、日本にあるような神々です。そういうものはこちらからは見えないけれども、向こうからは見ている存在として何か感じられる。亡くなっていった身近な人たちも又そうした存在です。その亡くなっていった見えざる存在がどこかで感じられる。そういう見えざる存在を冥衆という言葉で言おうとするわけです。

現代ではもう生きている時だけが勝負だという感覚で、冥衆はあまり力をもたなくなっていますけれど、そういう冥衆を感じずということも、命の本質にはあるように思うのです。ある意味でそれは怖いのです。そういうものが何か祟るのではないか、罰を下してくるのではないかとか、日本人の宗教観というのは、そういう冥衆の祟りを畏れて祀ってみたり、そういうことがあったわけです。

そういうものにおびえているのではなくて、むしろ冥衆に護ってもらって、こちらを見ている存



在に、どうぞ許して欲しいと言える存在として我々が立ち直ることが、親鸞が教えようとした冥衆護持の利益なのです。だから否定してしまうのではなくて、あってもそれが自分にとっては護ってくれる存在として感じられるのだというように転じてゆくことが大事な智慧なのではないかと思うのです。そういう冥衆を否定したら、多分、人間の生きる在り方が薄っぺらになってしまうと思うのです。

ある先生が言っておられたのですが、その先生は古い村に住んでおられて、村の会議に出てみたら、その会議に出ている長老方は古くからそこに居るから、家の前の道はじいさんが作った道であったり、裏山に生えている杉の木は曾じいさんが植えた杉であったりというようなことで、自分が居るだけではなくて、先祖伝来、護られて生きている、そういう感覚が非常に強い。そうすると会議をするときに、単に個人で今自分はこう考えるというのではなくて、「やあ、そういうことはやっぱりじいさんが許さないぞ」と、そのようにもものが発想されてくる。それが未来、次の世代に対しても今何をやっておくべきかという配慮にもなると。こういうことを言っておられて、面白いなと思ったことがあるのです。

現代の都市文明はそういう命の歴史の感覚がまったく抜けてしまって、そういうものをむしろ排除する面が強い社会になっていますけれども、現在だけが勝負なのではない。見えざる存在が現在を支えている。過去もあり、未来もあるという中に今があるのだから、我々も見えざる存在になった時に未来の人々に何が残せるかというような発想をすべきではないか。こういうことが人生を大事にさせるのではないかと思うのです。

生きた宗教としての 大乘仏教

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳

大拙の遺した文章はたくさんあるが、その共通点は「生きた文章」という表現に尽きる。大拙の生きた信仰がそのまま文章に反映されているのであろう。「文は人なり」という言葉は、まさに大拙、そして英訳『教行信証』にも該当する。今回もそのような文章を紹介したい。

■ 普遍的救済

英訳『教行信証』研究会を通じ、文章を精読してみると様々なことに気づく。その中で、大拙訳の特徴を一つ述べるのであれば、文字ではなく、文意を訳すことに重点があることが指摘できる。翻訳にはいくつかの方法がある。その中で私たちが想像しやすいのは原文と訳語を一致させる逐語訳であろう。しかし、大拙訳はそうではない。『教行信証』の字句を訳すのではなく、その意味するところを訳す箇所が見られるのである。過去にも述べたが、例えば「弘誓」に関する次の箇所がそうである。

AS I HUMBLY reflect, Amida's Prayer for universal deliverance is beyond my understanding. It is the great boat that crosses the ocean of impassability.

これは『教行信証』「総序」の「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」の翻訳である。言うまでもなく、この文章から『教行信証』は始まる。その点でこの一文をどのように訳すかは、英訳『教行信証』全体に影響を与えるだろう。その時に「弘誓」がAmida's Prayer for universal deliveranceとされているのは重要である。「弘誓」とは阿弥陀仏の本願が弘く、普遍的であることを指す言葉であり、直接的な字義に「救済」の意は含まれない。だが、大拙は「阿弥陀の普遍的な本願」と訳すのではなく「普遍的救済のための阿弥陀の本願」とすることにより、「弘願」の内実を顕現させたのである。このような動的な翻訳が、英訳『教行信証』の特徴であり、ひいては『教行信証』自体にも新たな生命を与えるものである。



■ 「生きた」宗教
このように大拙の翻訳には一つの躍動性が込められている。注目すべきは、そのような躍動的翻訳は、大拙の変わらぬ仏教観、ことに大乘仏教観から生まれていることだろう。

それは「生きた宗教としての大乘仏教」という理解である。大乘仏教は仏陀の真の教えではないという非難に対して「このような不幸な仮説のせいで、生きた宗教としての大乘仏教の重要性は全く無視され続けてきた」（鈴木大拙著／佐々木閑訳『大乘仏教概論』〔岩波書店、2016〕、25頁）と述べるが、その原文、*Outlines of Mahāyāna Buddhism*（1907年刊行）には次の通りにある。

Owing to these unfortunate hypotheses, the significance of Mahāyānism as a living religion has been entirely ignored.

このようなliving religionとしての大乘仏教理解は大切だろう。大拙は上記文章につづいてMahāyānism a Living Faithという節も設けている。「生きた信仰としての大乘」という意味であるが、このような「生きた」という感覚が大拙に保持されていたことは重要である。

『大乘仏教概論』は、英訳『教行信証』の約60年前の出版である。しかし、その内容は本願などの理解をはじめ、後の著作、そして英訳『教行信証』にも大きな影響を与えている。今、述べたlivingについては英訳『教行信証』の「大行」=the great livingが想起されるであろう。英訳『教行信証』だけを読むとthe great livingには若干奇異な感じをおぼえ、それが過去に注目されてきた由縁でもある。しかし、大拙においてlivingとはその宗教に生命観があることを示すキーワードであった可能性がある。『大乘仏教概論』の読解は、英訳『教行信証』理解にも大きな影響を与えるのではないだろうか。英訳『教行信証』は、その著のみを読んでいても、真意は読解できない。大拙の過去や、翻訳当時の文献を読むことにより重層的に理解できる。その点で、英訳『教行信証』と『大乘仏教概論』の比較は、今後の研究すべきテーマだろう。

◆ 第 1 回 ◆

「現代と親鸞」公開シンポジウム

〈かたられる〉死者

問題提起と開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託 中村 玲太

「大切な人が死にゆくときに、本質的な問題は「命が失われる」ことなのだろうか、という問いをずっと考えています。かけがえのないその人がいなくなる、まさに〈誰〉かが失われるということが悲しいのではないか（加藤秀一「〈生まれる〉ことをめぐる倫理学のために——〈誰〉かであることの〈起源〉」、『親鸞仏教センター通信』60号〔2017年3月〕、4頁）、これは第54回「現代と親鸞の研究会」にお招きした加藤秀一氏からの問題提起である。「まさに〈誰〉かが失われるということが悲しいのではないか」と語る視点は、死者に関しても同型の問いとして考え得るものである。「死者」と呼びならわしてきた、我々が悲しみ愛しみ、呼び、時には呼ばれるその存在は抽象的な「死者」などではなかったのかもしれない。我々がかたっていた亡き人の、〈誰か〉としての在り方がそこにあるのではないか。

しかし、そもそもなぜこうした問題提起をする必要があるのだろうか。それは、抽象的な、通約された「死者」にすることで、「死者」というものをあまりにも容易く扱える存在に変容させていると思わざるを得ないからである。数万の死も「死者」という語で括ってしまえば容易に語ることができる——〈かたられる〉のではないだろうか。数万単位の死ですら一人一人の人格を捨象して、容易に意味づけもできてしまう。「死者」と抽象化された者に対して一度立ち止まって考えてみたいと思い、議論の公開を目指した第1回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催した（2019年6月1日、於大正大学）。以下に提題者並びにコメントーターからの報告を記す。

◆ 提題

I

亡き人を〈悼む〉こと、 「死者」を忘れること

加藤 秀一（明治学院大学社会学部教授）

自分は生きているくせに、まるで「死者」に成り代わりうるかのように、今は亡き人々の思いを〈語る＝騙る〉こと。私はそれを〈非在者の騙り〉と呼び、その欺瞞性と暴力性を批判して



きた。そのような〈騙り〉は、「死者」たちの追悼という体裁をとりながら、実際にはしばしば、次なる死、より一層の犠牲を貪欲に求めるからだ。しかもそれは、必ずしも大きな声をもつイデオログたちだけのことではない。欺瞞と暴力の種子は、「死者」というありふれた観念の中にすでに胚胎している。近頃流行りの、「死者」と「生者」を対比するたぐいの言論の胡散臭さ。これに対抗して、私たちは、「死者」という胡乱な観念を忘れようと試みることはできないだろうか。私たちの一人一人にとって忘れがたい、かつて近しかった人をただ〈悼む〉ことに満足すべきではないだろうか——「国家」「民族」「共同体」等々と（その時々々の社会的雰囲気に乗じて）名づけられる虚妄のために誰かを殺すことを止めるためにも。

今回、かくのごとく素朴かつ粗っぽい私からの問題提起をめぐって、多くの人と討議する機会を得られたことは得がたい僥倖であった。主催者、登壇者、参加者のみなさまに心より感謝したい。

II

「死者」はどこにいるのか ——仏教の死者観と人間中心主義批判——

師 茂樹（花園大学文学部教授）

本発表では、唯識を中心に、仏教の視点から死者をめぐる議論を——現代においてどれほどの意義があるのか心もとないが——相対化することを試みた。



輪廻を前提とする仏教においては「死者は存在しない」と言ってもよいかもしれない。一般に死者として観念される地獄の

亡者や餓鬼らは、六道（六道）に生きる生者（衆生）である。人間が死後になるかもしれない餓鬼は、人間から見れば死者であるが、同時に餓鬼から見れば人間も死者である。死者に対する倫理があるとするれば、それは生きとし生けるものに対する倫理とほぼ同義である。

唯識において、六道それぞれの環境世界を作り出しているのはそこに生きる衆生のアーヤ識である。さらに言えば、衆生はそれぞれのアーヤ識が作り出す個別の世界に生きている。誰かの生前の痕跡は、六道の各環境世界の書き換えという形で現れる。ただし同じ世界に転生するわけではないため、ある衆生の前世の痕跡が同じ世界にあるとは限らない。個々の衆生が生きる環境世界には、死者の痕跡とともに、衆生自身の活動記録が刻まれている。このような世界観のなかで駆動される倫理とは、他者の立場には立てないし、他者を代弁することもできない、というものであろう。

III 極楽浄土に往き生まれて

吉水 岳彦（大正大学非常勤講師）

死者は生者から見た一過程の呼び名に過ぎない。念仏者にとっての「死」は、新たな「生」である「往生」に他ならず、浄土教における「死者」とは、「極楽に往き生まれた人」を意味する。

そして、地獄や餓鬼、畜生などの苦界に新たな生を得るのではなく、極楽往生という解脱を遂げ、なおかつ美しい有相莊嚴の世界を自由に飛びまわる生を得るのである。加えて、往生人は極楽で如来になることもできるが、この世に残した縁ある者を導こうと願えば、再び苦しみの世界に戻って来ることができる（還相回向）。

そのような死者（菩薩）の实在は、凡夫の目には見えないが实在する阿弥陀如来を信じて念仏申すうちに実感されてゆく。死別後の新たな生活を歩みだす念仏者は、極楽は遠けれども会いたいと願い念仏を申せば一瞬にして帰り来る菩薩（死者）が、必ず自分のもとを訪れてくれると、死者との持続的なつながりを見出す。そして、常に見守り導いてくれる如来や極楽の菩薩（死者）をそばに感じられるからこそ、どんなに厳しい環境におか



れようとも生き抜くことができるようになる。念仏者にとって死者は实在し、近くにも遠くにも居て、ときどき生者以上にその存在を感じさせる存在である。

◆ コメント概要

全体討議司会 中村 玲太

コメンテーター 佐藤 啓介（南山大学人文学部准教授）

三人の提題は、それぞれに重なり合うものであったが、特に、それぞれの提題者に次のようなコメントや質問をおこなった。

加藤氏は、亡き人を死者として一般化して悼むこと

の問題点を鋭く指摘した。その主張には全面的に賛同したい。そのうえで、亡き人を悼むことができるのは、その人と関わりがあった人に限るべきだとされたが、それでは、社会のなかで人との関わりが断たれ、無縁となった人を誰がどのように悼むことができるのか。次に師氏は『餓鬼草子』を題材としながら、人間界と餓鬼界などが複数の層からなる世界を構成している魅力的な世界像を描き出した。そのスケールに非常に刺激を受けたが、ではその場合、人間が餓鬼らのために行う供養の営みは、どのように意味づけられるのだろうか。最後に吉水氏は、死者を「極楽に往き生まれた人」として描き出し、そこから具体的な死者と生者との関わり方を描き出した。その倫理的な視座に貫かれた思索に敬意を表するとともに、端的に気になったのは死しても「極楽に往けない悪しき人々」をどう考えるのか、という点である。

上述のような倫理的・仏教的論点は、親鸞教学の観点も交じえていずれも全体討議のなかでより深められた。三人の提題者に深く感謝したい。



伝統に学びつつ 「正信念仏偈」を読む

親鸞仏教センター研究員 東 真行

「正信念仏偈」研究会立ち上げにあたって

親鸞仏教センターでは設立以来、親鸞のことばを課題とする研究会が続けられてきた。また、2010年からは『教行信証』をテキストとする研究会が開かれ、さらに2016年には「近現代『教行信証』研究検証プロジェクト」が発足している。本研究会では、それらの営為を継承しつつ、『教行信証』「行巻」中の「正信偈」をテキストとして、江戸期から近代、現代にわたる講義・講話・研究などをひもときつつ、読解を試みる。

親鸞の主著とされる『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）の「顕浄土真実行文類二」（「行巻」）末尾におかれる「正信念仏偈」（「正信偈」）は、蓮如の開版（1473年）以降にあって真宗門徒のなかでも格別の地位をしめる偈文であり、日々の勤行において数多の真宗門徒にもちいられている。

一般に親鸞といえば、『教行信証』よりも『歎異抄』に着目される状況が今なお続いているように感じられるが、親鸞の思想を学ぶという観点からはやはり『教行信証』を差し置くことはできない。とはいえ、『教行信証』は様々な経論釈の引用からなる大部の書物であり、日頃から親しまれるほど人口に膾炙^{かいしや}していないのも事実である。だが、その一部である「正信偈」はどうか。

『歎異抄』が日々の勤行でもちいられることはないが、真宗門徒においてはむしろ「正信偈」こそ、読誦^{どくじゆ}される機会が多く、おそらくもっとも親しまれてきた偈文であるといえるだろう。つまり、蓮如が「無宿善の機」にみだりに見せることはないとした『歎異抄』よりも、ある意味では「正信偈」を通して『教行信証』が親しまれてきたともいえるのである。

それほどまでに親しまれてきた「正信偈」だが、講義や講話が数多く遺されているものの、私たちはそれらをもとに十分に学んできたといえるだろうか。たとえば、CiNii Articles（研究論文等を検索できるサイト）で「親鸞」を検索すると、現時



点（2019年8月1日）で5820件の論文がならぶ。これは、題に「親鸞」という言葉をふくむ論文がそれだけ書かれてきたということを意味している。ちなみに「教行信証」では799件。対照的に「正信念仏偈」では28件、「正信偈」では56件の論文があがる。

偈の文言を一々に検索すれば、まだ幾分かの論文があがるだろうし、「親鸞」や「教行信証」といった言葉を題にふくむ論文のなかには「正信偈」について言及し、論じるものが多く存在するため、速断はできない。そもそも論文の数が本質的な問題でないことは明白である。しかし、親鸞における「正信偈」の大切さを考えるとき、この数は意外と少ないのではないかと感じられることもまた確かである。

「正信偈」については、存覚『六要鈔』、蓮如『正信偈大意』から、香月院深叻、円乗院宣明、香樹院徳龍などの講義録、暁烏敏、多田鼎、曾我量深、金子大榮、安田理深など、いわゆる真宗大谷派の「近代教学」を代表する先達による講話類、そのほか研究者による論文等にいたるまで膨大といってよい蓄積がある。それにもかかわらず、それらをふまえて内容について論じるものは決して多くはないといえるのではないか。

本研究会では江戸期から近現代にいたるまでの伝統に学びながら、あらためて「正信偈」の読解に取り組みたい。「正信偈」をつらぬくのは、阿弥陀仏と釈尊の二尊、そしてインド、中国、日本にわたる七人の高僧への讃嘆である。その淵源には、仏・祖師たちとの出遇いとその値遇をよろこぶ信がある。真実に遇いえた親鸞のよろこびとはいかなる感動であっただろうか。そして、私たちにあって真のよろこびとは何かが問われてくる。伝統に尋ねるなかでも、そのことはひとつ見失うことなく、親鸞のことばとしての「正信偈」に接してゆきたい。

源信『一乗要決』研究会報告①

東アジア仏性論争史における

『一乗要決』の位置

—源信研究の新たな射程—

親鸞仏教センター研究員 藤村 潔



源信『一乗要決』研究会立ち上げにあたって

本研究会では、平安中期に活躍した恵心僧都源信（942 - 1017）が叙述した『一乗要決』をテキストとして取り扱う。源信が40歳の頃に著述した『往生要集』は著名であり、極めて重要な文献であることは言うまでもない。その一方で、晩年の60歳代で書き上げた『一乗要決』もそれと双璧をなす極めて価値の高い文献である。『一乗要決』の撰述意図とその思想背景を解明することによって、源信における一乗・仏性思想の核心部分に迫りたい。

親鸞は、七高僧の一人に「源信僧都」を挙げて讃えている。親鸞は『往生要集』の所説に基づき「真実報土」「方便化身土」といった「報化二土」を分立したと宣言した。とりわけ『往生要集』の成立が鎌倉期の法然（1133 - 1212）と親鸞に継承されたことは浄土教思想史を語る上で決して外すことはできない。ところが、源信と親鸞を直線上に切り結ぶような論稿は、それほど多く見受けられない。

かつて金子大榮は「本願信の蓮は菩提心の華に包まれていた。それが源空に至りて華開蓮現して、念仏為本の唱道となり、親鸞に至りて華落蓮成して、他力回向の領解となったのである。…（中略）…茲を以て源空は「念仏為本」の語を『往生要集』に見出し、親鸞は誓願一仏乗の思想を源信の言葉より領会せるのであった」（『金子大榮著作集』第5巻、245頁）と述べている。金子に拠れば、師である法然は『往生要集』所説の「念仏為本」に注目したが、一方、親鸞は源信の一乗思想、すなわち「誓願一仏乗」を継承したものと捉えている。本文の中で金子は書名を挙げていないが、恐らく「誓願一仏乗」の淵源は、源信の『一乗要決』を指すものと推察される。

『一乗要決』とは表題が示すように、大乘仏教の根幹を「一乗真実」と見極め、源信時分まで継続された論争を集大成した著述に他ならない。本書の成立は、遠景には東アジアで勃興した仏性論争史があり、近景には、天台宗の最澄（766・767 - 822）や南都法相宗の徳一（生没年未詳）との間

で繰り広げられた三一権実論争に起因する。また、源信の師である良源（912 - 985）が、法相宗の仲算（935 - 976）と火花を散らした「応和の宗論」にも影響を受けたと想像される。『一乗要決』は、単に宗派間の争いに止まらず、中国・朝鮮半島の文献まで広く遡及し、思想史的な論証を試みている。本書の冒頭にも記されているが、この時の源信の年齢は65歳を迎え、病床に臥していた。そのため、自己の死期を覚り、弟子の協力を得て、『一乗要決』の撰述に踏み切ったのである。

たとえば「悉有仏性」の論点に関して言えば、主に『涅槃経』をめぐる教説が議論の要となる。中期大乘經典にあたる『涅槃経』は、衆生の機根の根源的課題を「一切衆生悉有仏性」の思想として宣説した。ただ、この「一切衆生」という言語のもつ意味が一体どのような範囲まで及ぶものか、東アジアでは活発に議論されるようになる。その発端を生み出した人物が、貞観十九年（645）にインド求法の旅から帰朝した玄奘三蔵（602 - 664）に他ならない。玄奘が翻訳した『瑜伽師地論』、『仏地経論』などの新訳経論には衆生の機根を「五種姓」に分類する教説が説き明かされた。さらに、顕慶四年（659）には弟子等と共に『成唯識論』が糺訳され、「五姓各別」（五性各別）が確立する。この点、中国唐代では悉有仏性説（一切皆成説）を主張する者らが批判を加えていく。そして、日本の平安期に至ると、三論や天台の学派が同じく一切皆成説を主張していくのである。つまり、『一乗要決』の撰述とは、玄奘以来勃興した350年の仏性論争史に決着をつけるべく主体的課題を担うものと言えるだろう。

本研究会では、『一乗要決』の文脈で語られる三乗・一乗の思想や五性各別・悉有仏性の議論が、源信の成仏論として一体どのように具現されているのかを明らかにする。こうした思想史的な見通しを立てることによって、後の親鸞が生み出した「誓願一仏乗」を見極めることができよう。

親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座2019

「信」という課題 参加者募集中!

親鸞仏教センターでは、毎年「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」を開催しております。今年度は

■「大乘の「信」を起こす
—「大乘起信論」を読む—」(全3回)

期日：2019年12月4日(水)、11日(水)、18日(水)
担当：藤村 潔(ふじむら きよし) 研究員



■「般若波羅蜜の信と行
—「大智度論」を読む—」(全3回)

期日：2020年2月5日(水)、12日(水)、19日(水)
担当：戸次 顕彰(とつぐ けんしょう) 研究員



■時 間：いずれも午後18時00分～19時30分

■資料代：500円
初回受付にてお支払いください。

※テキスト及び資料は当方で準備いたします。

■会 場：親鸞仏教センター 3階 仏間

「信」という課題」をテーマとして、下記の通り開催する予定です。「信」とは、仏教においては根幹に関わる問題であり、また私たちの生活を支える基本でもあります。現在の私たちの足下を確かめなおすためにも、あらためて今「信」を課題としたいと思います。

■「収容所の親鸞」という問い
—ソ連領被抑留者の信仰を読む—」(全3回)

期日：2020年1月8日(水)、15日(水)、22日(水)
担当：東 真行(あずま しんぎょう) 研究員



【最終講】

(期日：2020年2月26日(水)) 上記に加え最終回(第10回)の講座として、研究員3人を囲んだ交流会・質疑応答の時間を設けます。最終講まで是非ご参加ください!!

■お申し込み：参加ご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。定員35名。連続10回の講座ですが途中参加も歓迎です。

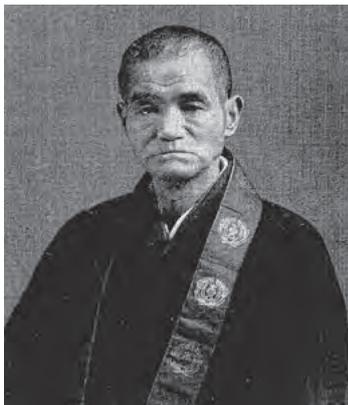
問い合わせ先

親鸞仏教センター 〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近現代の真宗をめぐる人々」第7回
すみだ ちけん (住田智見 [1868-1938])

住田智見といえば、地元名古屋の地において真宗専門学校(現・同朋大学)を設立した「学祖」として有名であり、また大谷大学学長を歴任した人物として知られる。住田の没後、門弟らが彼の遺徳を讃えて寄稿している。それらの記述によれば、大正7年(1918)に大学令発布に伴い「真宗大谷大学」を「大谷大学」に改名することとなった。しかし、住田は「真宗」という二字が無くなるならば、教壇に立つ意味がないとし、教授職を辞した。また、日本印度学仏教会創立の初代理事長、東大名誉教授であった宮本正尊(1893-1983)は学生時代、住田から真宗学の薫陶を受けたことを語っている。「今日多少なりとも『教行信証』はこうなどと言えるのは、ひとえに住田先生のお蔭である」と回想する。宮本の東大退官の最終講義は「証卷」であった。最晩年に住田が担当した『国訳一切経』所収の『教行信証』は、精緻な国訳・注解として傑作である。住田がこだわり続けた「真宗アカデミズム」は、今なお色褪せていない。(藤村潔)



親鸞仏教センターの動き

(2019年8月～2019年10月) 一抄出—

親鸞仏教センターでは、連続講座「親鸞思想の解明」(講師：本多弘之)を8月6日、10月15日に開催いたしました。また、月例研究会として、「三宝としてのサンガ論」研究会(戸次顕彰)、英訳『教行信証』研究会(田村晃徳)、『尊号真像銘文』研究会(菊池弘宣)を開催いたしました(※括弧内主催研究員)。7月から新たに東真行研究員主催の「正信念仏偈」研究会、藤村潔研究員主催の源信『一乗要決』研究会が始まりましたことをご報告申し上げます。新研究会の概要は本誌6、7頁に掲載されております。また、9月30日には、当センターに佐藤卓己先生(京都大学大学院教育学研究科教授)を講師としてお招きし第63回「現代と親鸞の研究会」が行われました。詳細は近日中にご報告いたします。

■研究発表

- ・長谷川琢哉「井上円了における進化論的倫理学の射程」(東アジア人文フォーラム〔8月4日、於北京大学〕)
- ・中村玲太「顕意の「唯心浄土」批判」(日本印度学仏教会第70回学術大会〔9月8日、於佛教大学〕)
- ・東真行「聖徳太子と日本主義——金子大榮を中心に」(日本宗教学会第78回学術大会〔9月15日、於帝京科学大学〕)
※パネル発表(パネルテーマ：「親鸞と日本主義の間」)
- ・飯島孝良「近代の居士禅における『臨濟録』受容と反響——前田利謙の場合」(日本宗教学会第78回学術大会〔9月15日、於帝京科学大学〕)

センター新スタッフの紹介

事務長	はやみ 速水	かおる 馨
書記補	ふどう 不動	まさとも 眞智